

「キリストの<sup>こうきよ</sup>高挙」について（ウエストミンスター大教理問答問51～52より）

K. T

昨年度、夕拝で担当しました大教理問答の学びを改めて読み返し、まとめたものを報告します。

大教理問答の51問は「キリストの高い状態とは何か？」という質問ですが、小教理問答の28問では「キリストの高挙（こうきよ）は、どの点にありますか？」という表現で出てきます。どちらも同じ意味ですが、「高挙」という言葉は、日本語辞書にも聖書にも出てこないキリスト教の専門用語です。「キリストが高く挙げられる」ということを以下に解説したいと思います。

キリストの「高い状態」を言い表すワードは、4つあります。

①「復活」②「昇天」③「御父の右に座している」④「さばきのための再臨」です。

紙面の関係で今回は「キリストの高い状態」を構成する四つの事柄のうちの①をお話したいと思います。

まず、この4つが発生している時を、時系列で並べてみます。キリストの復活と昇天は過去の事柄、父なる神の右に座したもうことは現在進行形、世を審判するために再臨されることは未来の出来事、というように過去、現在、未来と分けることができます。

まず、52問のキリストは①『復活』においてどのように高くされたか。』という質問についてですが、高い状態とはどのようなものであるかは、その前の復活以前のキリストがどのような状態であったかを思い起こしてみるとよくわかります。キリストの低い状態とは、その出生、生涯、死において常にへりくだっておられたものでした。救い主でありながら律法に服従し、この世の苦難、サタン誘惑、肉の弱さと戦っておられました。さらに、死の恐れと神の怒りを感じながら、十字架の苦しく、恥ずかしく、呪われた死を耐え忍んで受け入れたものでありました。そして、死は罪の支払う報酬であるにもかかわらず、まったく罪のないキリストが死の力の中にしばらくとどまっておられました。

「復活」において高くされたということは、そのような死の中で朽ち果てることなく、十字架にかけられた時と同じ人の姿で、ご自分の力でよみがえられ、それによってご自分が神の子であり、死と死の力に打ち勝つものであるということをはっきりと示してくださったということです。ヘブル2、14を読むと、はっきりと「キリストの復活はキリストが死の権能を持つサタンと死を征服されたこと」を宣言しています。また、ロマ14、9には（復活によってキリストはいける者と死ねる者との主であることが示された）と書かれている通りです。さらには、ロマ6、9には（死者の中から復活されたキリストはもはや死ぬことがないと知っています）とあるようにキリストの体は栄光の体でありました。そして、復活のもっとも重要なことは、Iコリント15、20（キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。）と記されている通り、この出来事はキリスト者が「終わりの日」に死人の中から復活することを保証するためになされたということからもわかります。

このキリストの復活によって示された大事な真理をまとめると5つあります。

- ①キリストは神の御子であるということ。
- ②キリストはその民の罪に対して、神の正義を完全に満たされたということ。
- ③キリストが死を征服されたということ。
- ④キリストはサタンと悪を征服されたこと。
- ⑤キリストが生ける者と死ねる者との主であるということ。（次回に続く）

「ダイヤモンドより平和がほしい」を読んで

N. S

ジャーナリストの後藤健二さんの本を読みました。初版は2005年なので10年前の記事になります。世界各地を取材して、戦争や難民問題の苦しみの中で暮らす子供たちに目を向け、その姿を伝えた記録の一つです。

シエラレオネの子供たちがどのように戦争に巻き込まれていったのか、戦後の状態はどうなっているのか等が書かれていて、その人達の将来のために私達は何かできるのかを考えさせられました。

シエラレオネは、アフリカ西部の大西洋側に位置し、平均寿命は世界で最も短く、男性約32才、女性約35才です。質の商いダイヤモンドの産地として有名ですが、その利益は国民生活を豊かにはせず、戦争の費用となり、戦争が長引きました。

歴史的には、19世紀にイギリスの植民地となり、1971年に共和国となったものの、1990年代は、度々、軍事クーデターが起き、1992年には反政府勢力が台頭、1999年に政府軍と停戦合意、2002年にやっと国家非常事態の終了が宣言されました。

後藤さんは、「アンプティ・キャンプ」と呼ばれる戦争で兵士達に手足を切られた人々が住む場所を訪問し、10才代前半の子供兵士によって右手を切られた人を取材しています。その人は言いました。「彼らは子供だし、何も知らずに兵士としてつかわれたのだからから彼を責めない。おれたちはこの国に平和がほしいんだ。何よりも平和なんだ。」と。

残酷な反政府軍は、親を殺した後、子供達を連れ去り、兵士として訓練しました。子供達は、厳しい訓練の後にもらえる食物のために耐えるしかなく、もし、上官の命令を拒否すれば殺されました。兵士となった10才~16才位の子供達は、大人の兵士に言われた通り村を襲い、家を焼きはらい、人々の手足を切り落とす戦闘マシーンになりました。

そのような反政府軍から脱走し、保護された子供達が暮らすセンターもあります。しかし、戦禍がやんでもストリート・チルドレンが増え、収入が無いために盗みや殺人、麻薬の販売などの犯罪に巻き込まれる子供達がいます。貧しい生活は、戦争が終わった時に抱いた明るい未来への期待を消し、失望と不満が新たな戦争を生む原因となっていきます。

「アンプティ・キャンプ」は「国境なき医師団」や「ハンディキャップ・インターナショナル」によって運営されていますし、元反政府軍の兵士だった子供達を保護するセンターは、スペインのカソリック教会が運営する施設です。

私は、このような人々のために何をすることができるのかと思いました。平和を壊す者にはなく、少しでも平和をつくる者になりたいと思います。

また、日本も、先の大戦のような過ちを二度と繰り返さず、「戦争をしない国」として現憲法を保ち、戦争の無い世界を目指さなければならないと思います。

「子ども達をわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちの者である。…」マルコ10：14

昨年、Kが小学校に入学したことをきっかけに教会学校の働きに本格的に加えていただきました。まだ、何となく手がかかる時期でもあるので奉仕に加わるのが不安でしたが、手が足りないということもありこれは神様からのチャレンジかな？と思って始めることにしました。

私は高校生の時に同級生に誘われて教会に来ました。教会学校の高校生会に出ましたが、小さな部屋に5～6人の生徒が出席していました。それまで、教会というところに来たこともなかったのになんだか居心地がよく、楽しかったのを覚えています。楽しかったといっても、別にゲームや何かをしたのではなく、毎回賛美をして聖書のお話を聞くというただそれだけだったのですが…。

ただ、先生方や高校生会の仲間が私のことを歓迎してくれていることが良くわかりました。それがとても居心地良く、「自分がいてもよい場所」なんだと感じました。

そんな経験から私も子どもたちに、教会に歓迎されていると感じて欲しいと思っています。そのためには、名前を覚えたり、話をしたり、一緒に時間を過ごすということ（小さなことかもしれませんが）をして彼らにここは「自分の居場所なんだ」と感じて欲しいのです。

今は自分の子どもも教会学校で教育してもらい、楽しく通えていることを感謝しています。多くの方の祈りと献身によって支えられています。子供たちの人数は年々減っていると思います。種まきのような仕事ですぐに芽がでるわけではないと思いますが、「全世界に行って、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」というイエス様の宣教命令に従い、少しでも多くの子どもたちに福音を伝え、契約の子たちやすでに信仰を持っている子ども達を教育していくことに携わらせていただきたいと思います。

現代の子ども達は、昔とは違う意味で多くのプレッシャーの中にいます。その子たちが、自分の居場所と思える場所として、神様に出会える場所として、教会があればいいなと思います。それは、教会学校という限定された働きだけでなくもっと広い働きにおいてもです。

教会学校の教師をしていなくても、「教会のおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さん」として、ぜひ子供たちの祈りのサポーターになっていただきたいです。